

「米語と日本語の映画における初対面の男女間の談話分析」

異文化交流ゼミナール 1214147 堀切泰明

1. 研究動機・研究目的

本研究では、米語と日本語それぞれの映画において、男女間で交わされる談話内容の違い、言語的、文化的要素の影響について、データを数値化し分析した。また、本研究から得られたデータをもとに異文化間、特に米語と日本語における相違点を検討した。本研究は、最終的に恋愛関係となる男女の初対面の談話に着目し、映画の中で交わされる談話内容、表現方法などを比較検討し、米語と日本語における類似点と相違点を観察した。

現代社会では、科学技術やインターネットの発展により、国際化が急速に進んでいる。これに伴い、異国の文化や人々に接する機会は増えてきている。人同士の関係はコミュニケーションをとることによって成り立っている。コミュニケーションは、言語から作られるメッセージの交換と意味の創造であり、伝達されたメッセージは、そのメッセージやコミュニケーションの状況から意味付けされる。さらに、これらのメッセージの伝達と解釈は、文化的背景と生活体験に影響される。つまり、人と人とのコミュニケーションは、それぞれの国の文化と深い関係を持っている。このことから、コミュニケーションにおいて重要な要素である言語に着目し、文化を比較、検討した。

2. 研究方法

本研究の方法は、恋愛関係に発展する男女の初対面の談話を含む 2004 年以降の日米語映画 10 本ずつを分析し、相違点と類似点を検討した。本研究のデータを収集するにあたり、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションに分けて分析を行った。言語的コミュニケーションについては、発話した方の性別、発話時の文の種類、自己紹介の有無と自己紹介までの流れに着目した。また、非言語的コミュニケーションについては、ボディランゲージの種類と回数に着目した。

3. 主な結果と考察

米語映画に関しては、男性から女性に対して発話することが多かった。これは、米語圏において、男性から女性にアプローチするのが自然であるという認識が影響していると考えられる。一方、日本語映画において発話した方の性別に大きな差がなかったのは、日本においても、男性から女性にアプローチするのがスタンダードであるという認識があるものの、日本語の恋愛映画は、女性の一目惚れや片思いを描くものが多いことが関係していると考えられる。

米語映画では多くの作品で初対面時自己紹介描写があったが、日本語映画では、初対面時自己紹介描写がある作品は少なかった。このことは、各個人を大切にする自己責任社会

である英語圏と、無意識のうちに動作主を隠し、集団行動を大切にする日本文化との違いが関係していると考えられる。

各ボディーランゲージの回数に関して、米語映画、日本語映画共に性差は見られなかった。ボディーランゲージの種類別に注目すると、微笑に関しては、米語映画よりも日本語映画で2倍以上多く見られた。また、握手に関しては、米語映画では3度見られたのに対し、日本語映画では1度も見られなかった。これは、日本語でのやりとりにおいて、微笑は単に笑いや失笑を表すだけでなく、あえて口にしないものの、相手に好意を持っていることを示したり、その場をなんとなくやり過ごすための表現であったりするからだと考えられる。一方で、米語文化では、思っていることを表現することが基本であり、それ以外で微笑むことはない。また、米語文化において、初対面時に握手することはスタンダードであり、場合によってはハグをしても違和感が生じるものではない。一方、日本においては、初対面の人のみならず、他人との身体的接触を好まない傾向があり、特に初対面においては身体的距離をおくことから解釈できる。

4. 結論

初対面時の談話に関して、日米語ともに初対面の印象形成を無意識のうちに考慮していること、日米語ともに男性から女性に対してアプローチすることが多いという性差、個人を尊重する米語圏では、初対面時自己紹介が自然となされる一方で、個人の尊重度合いの低い日本では、初対面時自己紹介がほとんどなされないという違いが観察された。また、初対面時のボディーランゲージにおいて、日本人は、相手への漠然とした好意を示すために微笑を多用するということが、米語圏において、初対面時に握手をすることはスタンダードであるが、日本においてはそうではないということが明らかになった。これらのデータから、恋愛感情に発展する男女の初対面の談話は、曖昧にしか自己表現をせず、相手によく察してもらおうとする高コンテクスト言語である日本と、自己主張と自己表現をしっかりと行う米語の特徴を著しく反映しているといえる。また、男女の性差については、文化的背景は少なく、米語、日本語共に同じような固定概念が影響していると思われる。

5. 卒論の執筆を終えて

4年間の大学生活の集大成として卒論を書き終え、大学生活の終わりが近づいてきたことを実感している。2年生の時に参加したコロラド研修は、その後の大学生活を一変させるものになったと感じる。文化、生活様式、常識の異なる国や人と関わることで、日本や自分自身を再確認し、自分の考える当たり前は、自分の中の常識に過ぎないという事実を理解してコミュニケーションをとることの大切さを体感し、視野を広げることができたと確信している。これからも、自分で決めた枠に当てはまるか否かで物事を判断するのではなく、その地域、環境、人に合わせて行動や感覚を柔軟に変化させ、異文化コミュニケーションを楽しみたい。